Program

フォーレ：ヴァイオリン・ソナタ 第1番 イ長調 作品13
Gabriel Fauré: Violin Sonata No.1 in A Major, Op.13

Ⅰ Allegro molto
Ⅱ Andante
Ⅲ Allegro vivo
Ⅳ Allegro quasi presto

プーランク：ヴァイオリン・ソナタ《フェデリコ・ガルシア・ロルカの想い出に》 FP.119
Francis Poulenc: Violin Sonata, FP.119

Ⅰ Allegro con fuoco
Ⅱ Intermezzo. Très lent et calme
Ⅲ Presto tragico

～休憩～

ショーソン：ヴァイオリン、ピアノと弦楽四重奏のためのコンセール ニ長調 作品21
Ernest Chausson: Concert for Violin, Piano and String Quartet in D Major, Op.21

Ⅰ Décidé - Animé
Ⅱ Sicilienne. Pas vite
Ⅲ Grave
Ⅳ Très animé

Program Notes

プログラム・ノート ～「音の夢」をめぐって

矢澤 孝樹 ＜音楽評論＞

夢という言葉には甘美な響きがある。ともすればこの現代社会において、実現性の薄い漠然とした願いをうっすら糖衣でコーティングし、夢という名をつけてしまえばすべてが許されるかのよう。だが夢は本来、もっと切実で、ときには危険なものだ。眠りという無意識の深淵から私たちの潜在的な望みや不安、恐怖を束の間の幻に変え立ち昇らせ、目覚めればそれは一瞬にして消えてしまう。その幻を無理やりにでもとらえようとすれば、たちまち狂気の闇が待ち構えている。ゆえに現実世界において本来の夢の類似物を、「望み」という形で見つけようとするならば、それは現実に向かいあうことを適度にやり過ごすための生温かい逃げ場などではなく、本人まで焼き尽しかねない、燃えるような切望の形をとらねばならないだろう。

小林美恵のデビュー25周年リサイタル・シリーズ第2回は、「音の夢」と題されている。ここで用いられている「夢」が、冒頭に書いたようなありがちに安易な意味で用いられているわけでは決してないことは確かだ。すべて彼女の愛するフランス音楽から選ばれた3曲はそれぞれ、小綺麗だが実体のない紙細工のような“夢”とは無縁の、抜き差しならない訴求力の強さをその身体にみなぎらせている。そしてそこに、小林自身の「夢」が重なる。その夢は何か、そして3曲に彼女はどのような「夢」を見出したのか。今宵の演奏がそれを証明することは言うまでもないだろうが、この解説がその世界に入ってゆくためのささやかな手がかりの役目を果たすことは、最低限の使命であろう。

フォーレ：ヴァイオリン・ソナタ 第1番 イ長調 作品13

古今のヴァイオリン・ソナタの中でも屈指の名作として愛されているガブリエル・フォーレ（1845～1924）の《ヴァイオリン・ソナタ　第1番》。流麗な旋律と抒情性を兼ね備え、多くの聴き手を惹きつける魅力と香気を放ち続けている。だが、外面的な魅力の陰で、この曲が備えている意義の重さを忘れ去ってしまうわけにはいかない。

そもそも、フォーレという音楽家が、その静かなたたずまいの一方で、当時のフランス音楽界において極めて「新しい」存在であったことを特記せねばならない。ニデルメイエール古典宗教音楽学校でサン=サーンスに師事し、最初の仕事がレンヌのサン=ソヴァール教会のオルガニストであったというフォーレは、オペラが幅を利かすきらびやかなパリの楽壇において、はじめから異質な存在だった。歌曲とピアノを中心に書き、やがてサン=サーンスやフランクと共に、「フランス国民音楽協会」を設立する。器楽曲を主体とし、オペラの支配に抗しフランス器楽の復権をめざす同団体の活動の中で、フォーレはそれまで書いたことのない大規模なソナタを手がける。1875年、ベルギーのヴァイオリニスト、ユベール・レオナールとの交流の中でヴァイオリンとピアノのソナタは着手され、翌年の夏にようやく完成された。師サン=サーンスのヴァイオリン・ソナタよりも、年長のフランクやブラームスのそれよりも、先んじていた。1827年の国民音楽協会での初演（本人のピアノとマリー・タヨーのヴァイオリン）は大成功だったが、フランスの出版社は出版を拒否し、なんとドイツのブライトコップフ・ウント・ヘルテルから刊行された。あまりに斬新な作品だったのだ。

だがその画期的な斬新さを、フォーレはなんという自然な音楽の抑揚に托したことだろう。4つの楽章に古典的な形式を逸脱する点は少ないが、音楽の昂揚を妨げないためにあえて形式的冒険を避けたかのように思われる。シンコペーションのリズムで始まる第1主題の抑えきれぬ感情の高まりが一気に駆け抜ける第1楽章、舟歌の抒情性に支配された第2楽章、悪戯のように駆け回る第3楽章、そして再び燃え上がる終楽章。この大胆で自由な筆致が単に新しい分野への挑戦の気概では説明がつかないとしたら、それはマリアンヌ・ヴィアルドへの熱烈な恋心にも求めて良いのかもしれない。その恋は無残に終わるが、その傷心が刻まれたピアノ四重奏曲第1番（1879）以降、フォーレが書いた多楽章の室内楽曲9曲のうち、長調を主調にとる曲はひとつもなかった。

フォーレはのちに深まり、孤高の峻厳さの中で幻想=夢を紡いでゆく。しかしこの曲には、小林美恵の言うように「若いフォーレのほとばしる情熱の夢」が、取り戻せない一回性と共に永遠に刻まれている。

プーランク：ヴァイオリン・ソナタ《フェデリコ・ガルシア・ロルカの想い出に》 FP.119

そのフォーレの《ヴァイオリン・ソナタ第1番》を1928年に、ジャック・ティボーとアルフレッド・コルトーの演奏で聴き、この半世紀に書かれたヴァイオリン・ソナタの中でも最高の曲、と呟いた作曲家がいた。フランシス・プーランク（1899～1963）である。ポスト・ドビュッシー／ラヴェルの世代を代表する「6人組」の一人として登場し、ダダイズムとシュルレアリスム、新古典主義の狂騒を軽やかで清々しく、ウィットの効いた作風で駆け抜けていったパリの音楽家。だが一方で敬虔なカトリック教徒でもあり、その音楽は「悪童と修道僧の2つの顔を持つ」と評される。《ティレジアスの乳房》《カルメル派修道女の対話》という2つの対照的なオペラを聴けば、そのことはすぐに会得されるだろう。

管楽器を愛したプーランクは多くのソナタを書いたが、弦楽器は少なく、ヴァイオリンとチェロのソナタが1曲ずつあるのみ。1943年の《ヴァイオリン・ソナタ》には、悪童と修道僧、どちらの顔があるか。

答えは「戦争」と「ガルシア・ロルカ」の中にある。第二次大戦、ナチス・ドイツによる占領下のパリ。作曲家の頭をよぎったのは、1936年、スペイン市民戦争の最中にファシストたちによって虐殺された詩人、ガルシア・ロルカ。精神の自由と喜びを愛し、同性愛者としての共通点も持ったロルカへの共感とその悲劇的な死の追悼、ファシズムと暴力への怒り。それらがこの曲に托されている（同じく反ファシズムの人間賛歌、カンタータ《人間の声》も聴いてほしい）。なおプーランクは戦後、ロルカの三つの詩に曲をつけた。

第1楽章は怒りと不安、憧憬がせわしなく交錯する急速楽章。そして第2楽章はロルカの詩句《夢の精がギターの音に涙する（La Guitare fait pleurer les songes）》が掲げられた物憂い音楽。詩句は続く。「ギターがすすり泣き始める…それを止めることなどできない…ギターよ、五本の剣で重い傷を負わされた心臓よ」ギターという暗喩をめぐり詩人と作曲家の想いが重なる。第3楽章は悪童がドン・ファンのごとく快活に駆け回ったと思いきや、突如音楽は暗転し、最後はロルカを殺した銃弾が暗示されて終わる。悪童という名の自由の死を、修道僧が葬送する。小林美恵は言う、「プーランクの曲の最後に聴かれる、ロルカが銃殺される音とともに消えていく夢。」そう、これは断ち切られた夢の音楽。

ショーソン：ヴァイオリン、ピアノと弦楽四重奏のためのコンセール ニ長調 作品21

「そして、ショーソンのコンセールを演奏するのが私の夢でした。いつか、いつか弾きたいとずっと思っていました。今回ようやく、素晴らしいピアニスト 萩原麻未さんと（クァルテット・）エクセルシオの皆さんと一緒に実現します。本当に夢のようです。」水戸芸術館時代、所属した専属楽団「ATMアンサンブル」の演奏会で弦楽四重奏メンバーとして小林美恵がこの曲を弾くのをかつての担当者として耳にしてはいるが、独奏ヴァイオリン・パートを弾くのは初めて。演奏会の最後に、こうして小林美恵の「夢」が重なる。

曲はエルネスト・ショーソン（1855～99）の《ヴァイオリン、ピアノと弦楽四重奏のためのコンセール（以下「コンセール」）》。フランク門下で学び、師の強い影響を受けたショーソンだが、代表作《詩曲》や《終わりなき歌》等に聴かれる、青白い焔の燃焼を思わせる幻想性は、ショーソンこそ文字通りの「夢」をとらえ得た作曲家のひとり、と形容したくなる。《コンセール》が作曲されたのは1889～91年。ベルギーの名ヴァイオリニスト、ウジェーヌ・イザイが独奏を務めた初演は作曲者に最初の成功をもたらした。

それにしても、ヴァイオリン、ピアノ、弦楽四重奏という編成の室内楽は他に類例をみない。原題のConcertはかつて「協奏曲」と訳されていたが、たしかにヴァイオリンとピアノを独奏者とする室内協奏曲の趣はあるものの、これは誤訳だろう。フランスでも協奏曲はConcertoの伊語表記だし、Concertは17～18世紀フランスの合奏音楽「コンセール」を指すと考えて間違いない。フランソワ・クープラン《王宮のコンセール》、ラモー《コンセール形式のクラヴサン曲集》などをどの程度ショーソンが知っていたかは不明だが、国民音楽協会がフランス器楽音楽の復興を企図していたこと、師フランクのヴァイオリン・ソナタが明らかに古い「教会ソナタ」の楽章構成を援用していることなどを考えれば、ショーソンが古典フランス器楽音楽にオマージュを捧げていることは想像に難くない。

しかし古典コンセールの優雅な世界と、《コンセール》は大きく異なっている。フランク譲りの循環形式で曲は綿密に構成されつつ、抑えがたい情熱が終始楽曲を満たしている。重厚なピアノによる動機に導かれて始まる第1楽章はたちまち白熱し、ヴァイオリンはピアノの激しい動きと弦楽四重奏の豊潤な織地に支えられてどこまでも飛翔する。フォーレを思わせるシシリエンヌの哀愁、悲劇的なパトスが激発する第3楽章を経て、輝かしいクライマックスの終楽章へ。作曲家と演奏家の燃え上がる夢の航跡を、最後の一音まで逃さず追い続けたい。

デビュー25周年記念 小林美恵 ヴァイオリン・リサイタル・シリーズ 2015-2016 全5回

- 第1回「音の旅」 2015年6月7日(日) Hakuju Hall　ピアノ：加藤洋之
- 第2回「音の夢」 2015年10月16日(金) 東京文化会館小ホール　ピアノ：萩原麻未／弦楽四重奏：クァルテット・エクセルシオ
- 第3回「音の宇宙」 2016年2月6日(土) 14:00 ヒルサイドプラザ(代官山ヒルサイドテラス内)
  J.S.バッハ：無伴奏ヴァイオリン・ソナタ＆パルティータ(全曲)　お問合せ：アーツ・アイランド 03-6914-0353（発売中）
- 第4回「音の神秘」 2016年6月25日(土) 14:00 Hakuju Hall　ピアノ：上田晴子（2016年2月発売予定）
- 第5回「音の饗宴」 2016年10月19日(水) 東京文化会館小ホール　with ドレスデン国立歌劇場室内管弦楽団